第 19 回全国高等学校情報教育研究会 全国大会（神奈川大会）の報告

東京情報大学 教授
滑川 敬章

1. はじめに

8 月 7 日（金），8 日（土）の 2 日間，第 19 回全国高等学校情報教育研究会[1]全国大会（神奈川大会）が，神奈川大学横浜キャンパスを会場に開催された。主催者から，歴代最多となる 680 名以上の参加があったとの発表があり，非常に活気ある大会となった。

2. 大会概要

【テーマ】今，改めて情報教育の本質を考える
～情報科の力の結集～
【期日】令和 8 年 8 月 7 日（金）から 8 日（土）まで
【会場】神奈川大学 横浜キャンパス
【主催】全国高等学校情報教育研究会
【共催】神奈川県高等学校教科研究会情報部会
神奈川大学
【大会 URL】https://www.zenkojoken.jp/19kanagawa/
【プログラム】

○ 8 月 7 日（金）

12:30 ～　開会行事
13:00 ～　基調講演
講演者：山口 高平 氏
神奈川大学情報学部 教授
演題：「人と連携できる生成 AI システムに向けて」
14:20 ～　ポスターセッション／企業展示
15:30 ～　分科会（セッション 1・2・3）
17:00　大会 1 日目終了
17:30 ～　教育懇談会

○ 8 月 8 日（土）

9:00 ～　分科会（セッション 4・5・6）
10:30 ～　ポスターセッション／企業展示
11:30 ～　昼食・休憩
13:00 ～　分科会（セッション 7・8・9）
14:45 ～　講演
講演者：須藤 祥代 氏
文部科学省教科調査官・国立教育政策研究所教育課程調査官
演題：「情報科の現在と未来～情報科の本質とは何か～」
15:45 ～　閉会行事

3. 大会の様子

(1) 基調講演

山口高平氏の基調講演では，約 40 年にわたる AI 研究の歩みを背景に，AI の歴史から生成 AI の特徴，社会での AI・ロボット活用，人と AI との連携まで幅広い内容が紹介された。高速道路の点検で熟練者の知識をシステム化する取組，複数のロボットを連携させて接客から調理までを行う実証実験，小学校の授業に対話ロボットを導入し児童の発言や議論を促した実践など，具体的な事例が紹介された。

生成 AI については，生成 AI だけでなく従来の AI にもそれぞれ得意・不得意があり，目的に応じて使い分け，組み合わせる「ハイブリッド AI」の考え方が示された。また，回答の質はプロンプトの内容にも左右されるため，望む結果を得るには，人間側が指示を工夫･改善する必要があると説明された。

これから求められるのは，AI を単に利用するだけでなく，様々な AI の特性を理解し，それらをコントロールして組み合わせを考えられる「指揮者」のような人材であると話された。質疑応答でも，最後は人間自身が学び判断すること，実際の現場で AI を適用して成果を出せることの重要性が示された。

(2) 分科会発表

4 会場に分かれ，2 日間 9 セッションで計 36 件の発表が行われた。「AI」または「生成 AI」を題名に掲げたものが 15 件あり，AI に関する発表の多さが目立った。また，プログラミング，モデル化とシミュ

レーション，データの活用，情報デザイン，著作権，情報Ⅱ，探究的な学び，中高・高大の接続など，情報科の幅広い内容に関する実践が報告された。

AIに関する発表の内容も多様で，出力を「疑って使う」力を育てる実践，モデル化を支援するチューターとしての活用，AIを「代行者」でなく「伴走者」とし，思考を深める実践，アプリ開発や教材開発への活用などがあった。一方，マイコン製作によるコンピュータの仕組みの理解，情報Ⅰを分野横断的に捉える授業構成，情報Ⅱでのデータ収集・分析や探究活動など，情報技術の原理理解や問題解決を重視した発表もあった。生成AIを活用すること自体ではなく，情報科で何を理解させ，何を考えさせるのかに踏み込んだ実践も多く見られた。

(3) ポスターセッション／企業展示

ポスターセッションでは，2日間で計43件の発表が行われた。統計・データサイエンス，プログラミング，情報Ⅱ，生成AIなどに関する授業実践や教材開発のほか，教員研修や情報科教員のネットワークづくりなど，多様なテーマが取り上げられ，発表者と参加者の間で活発な情報交換が行われた。

企業・団体等の展示も43件あり，教材，学習支援サービス，プログラミング環境，AI関連サービスなどが紹介された。新たな教材や技術に触れ，情報交換できることも，大会の大きな魅力の一つである。

(4) 講演

2日目の須藤祥代氏の講演では，中央教育審議会での検討状況について，情報教育を中心に説明があった。冒頭では，生徒を主語にした取組，生成AIの活用と特性理解，情報科の内容を深く学ぶ工夫，教材開発など，今大会の発表には大会テーマである「情報科の力の結集」を感じたと話された。

次期学習指導要領に向けては，「多様な子供たちの深い学びを確かなものに」という考え方を基盤に，資質・能力の一体的な育成や「深い学び」を授業へつなげるための構造化が検討されている。情報教育については「情報活用能力の抜本的向上」を掲げ，小・中・高を通して体系的・系統的に育成する方向が示された。小学校では「情報の領域（仮称）」を，中学校では「情報・技術科（仮称）」を新たに設け，高等学校では「情報Ⅰ」を維持し，その基礎の上に「情報Ⅱ」を置く基本構造を維持することなどが紹介された。

「情報Ⅰ」については，情報の仕組みと社会との関わりを基盤に，情報デザインとデザイン思考，データ分析とモデル化・シミュレーション，アルゴリズムとシステム開発という課題解決のアプローチを学び，それらをPBLによる課題解決の実践で統合して，実社会の課題に取り組む構成が示された。また，AIについては，「AIを活用して学ぶ」「AI自体を学ぶ」の両面で整理していると説明された。

さらに，現在の授業から取り組めることとして，1コマ単位の教員主導の授業から，単元全体を見通した学習者主体・探究的な授業づくりへの転換が必要だと説明された。単元の中で全体説明，個別学習，ペア・グループでの協働学習を組み合わせてデザインすること，生成AIについては，AIが有効な場面とそうでない場面を見極め，いつ使うか，あえて使わないかを判断する力が求められると話された。最後に，「情報科の本質とは何かを問い続けながら，皆様と共に未来を創っていきたい」と締めくくられた。

4. 大会資料について

大会サイトには，分科会・ポスター発表の要旨や分科会のスライド等が掲載されている。また，発表者の了解が得られた基調講演・講演・分科会発表の動画も申込により視聴できる。大会冊子もAmazonで購入できるので，ぜひサイトを参照してほしい。

5. おわりに

今大会では，生成AIという大きな変化を受け止めながら，情報科で育てるべき力や授業の在り方を，具体的な実践を通して考える発表が多く見られた。同時に，次期学習指導要領に向けた議論が具体化する中で，小・中・高を通した情報教育のつながりや，情報科の役割について考える機会にもなった。

大会テーマにある「情報科の力の結集」は，講演や発表だけでなく，会場での質疑や情報交換，教育懇談会など，多くの人との交流を含めて実感できるものであった。大会で得られた学びをそれぞれの学校での授業づくりにつなげてほしい。

次回の第20回大会は，2027年8月10日（火）・11日（水・祝）に，島根県松江市で開催予定である。全国の先生方と再び学び合えることが楽しみである。

参考文献

1）全国高等学校情報教育研究会，https://www.zenkojoken.jp/